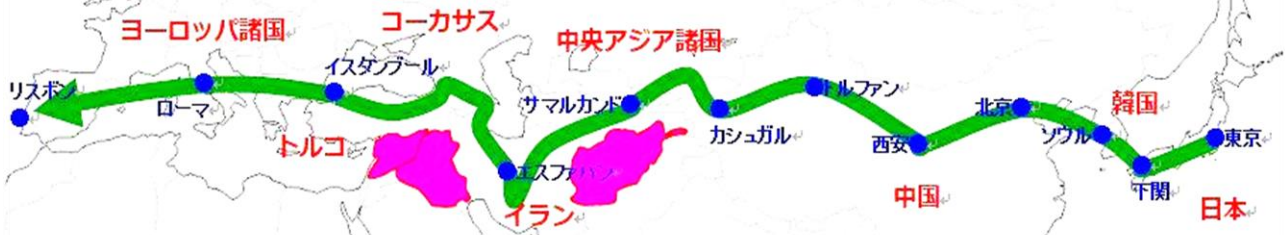


## 21世紀医療課題委員会 第39回公開フォーラム

## 人間の移動と疾病、その攻防

## 招かざる疫病、その過去、現在、未来を考える



人間の移動が遭遇する疾患との戦いの過去から現在、そして未来への警鐘。普通の学会では見られない時空を越えたフォーラムが6月17日に、日本医科大学橋桜会館（東京都文京区）で開催されました。14世紀のヨーロッパではペストが猛威を振るい、難を逃れてアメリカ大陸に渡った人々により天然痘が持ち込まれました。人類の歴史は、経済・文化交流が急速に進んだ一方で、疫病を世界に拡散した歴史でもありました。フォーラムでは、沖縄麻疹を防ぐ成田空港の検疫状況や、最近日本で急増している謎の梅毒、東京五輪の瀬戸際対策、さらには中国が進める「一带一路」構想により懸念される新興・再興感染症への対応などが提起されました。

## 歴史が語る疫病と人類との戦い～シルクロードからヨーロッパ、アメリカそして日本～

21世紀医療課題委員会代表／日本医科大学連携教授 福生吉裕

人類社会の発展にとってグローバル化という現象は最も大きな基軸をなすものです。その昔、シルクロードは東西の文化交流をなすことで、経済発展の大きな架け橋となりました。人類の移動という名のグローバル化は未知への恐れでもあり同時に、その一方では疾病との遭遇でもありました。

例えば14世紀、モンゴル帝国の侵出により人類と共に移動した齧歯類の移動はヨーロッパに拡散し、ペストという大きな代償を払わされることとなります。そして15～16世紀、大航海時代では新大陸発見によりヨーロッパの文化はアステカ、インカに押し寄せ、武力と共に病原菌、天然痘をもたらし、文化の消滅を至らしめることとなりました。

21世紀において交通機関のさらなる発展により、人類は生活の質を謳歌し、経済効果を求め安易なグローバル化が進められています。その結果、沖縄の麻疹、デング熱、梅毒、鳥インフルエンザ、火蟻など日本を襲う新興・再興感染症の脅威は後を絶ちません。これらは何かの警鐘でしょうか。

現在、世界の60%の人口の経済に影響を与える「一带一路」の開発が進められています。21世紀のシルクロードである「一带一路」が及ぼす疫病との遭遇は現在未知のままです。しかし、既にCO2排出増加も含めその課題は多いと考えられます。世界が安心、安全の生活と経済発展を遂げるには一带一路は21世紀医療の喫緊の課題であるといえます。

## 感染症流入防止の最前線から観る課題～空港検疫の実務：沖縄麻疹の教訓から～

日本医科大学成田国際空港クリニック所長 赤沼雅彦

日本医科大学成田国際空港クリニックは、平成4年12月の成田国際空港第2ターミナルの供用開始とともに開院しました。365日9時から17時まででは通常診療時間であり、その他の時間帯は、医師と看護師が待機しており、急患診療を実施しています。

成田空港利用数は、1日の国際線旅客が約10万人、国内線旅客は約2万人です。成田空港検疫所は入国者の検疫業務（入国時健康相談や検疫感染症のスクリーニングや検査及び必要に応じた隔

離・停留・消毒など)だけでなく、感染症を媒介する蚊などの衛生害虫の調査(蚊の種類と病原ウイルス等の保有検査)、輸入動物の衛生管理、輸入食品の衛生管理、保健衛生に関する普及啓発を行っています。当クリニックでも検疫所から委託され、検疫感染症流行地域から入国者の採血と迅速検査の判定や黄熱病ワクチン接種を実施しています。

2018年3月23日、沖縄県を旅行中の台湾からの旅行者が麻疹と診断され、この患者と接触歴のあった二次感染例を中心に、沖縄県内では麻疹患者の発生が続き、また、県外へも感染が拡大し愛知県など複数県でも広がっています。感染症には潜伏期があり長期では2~3週間に及ぶ疾患も少なくありません。しかし、現在では地球のあらゆる地域から24時間程度で日本国内に到達でき、到着時は未発症で国内移動時に発症する可能性が高く、空港検疫で全ての感染症の流入を防ぐには困難なところもあります。

## 増える梅毒、その現状と対応策

一般社団法人日本家族計画協会理事長 北村邦夫

1999年から感染症法によって五類感染症として全数報告が義務づけられている梅毒。診断した医師は7日以内に最寄りの保健所に届け出ることになっています。2017年には、その数は全国で5,820件(男性3,925件、女性1,895件)となり、前年比1.3倍、10年前に比べると7倍に増えています。従来から梅毒はHIV/AIDS同様、男性間の性的接触が最大要因とされてきましたが、この5年間で男性の増加率が4倍であるにもかかわらず、女性は8.1倍に増え、まさに女性の梅毒急増となっています。しかも、若年女性でその傾向が一層強く認められています。

このような女性の梅毒急増の原因について、異性間の性的接触による口腔性交や肛門性交など性行動の多様化だけでなく、SNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)などの普及によって、簡単に見ず知らずの男性と出会い、アルバイト感覚で性交渉をし、感染しているのではないかと分析する専門家もいます。さらに危惧されるのは、こうした女性の年齢層が妊娠・出産時期と一致していることから、小児の先天梅毒の増加につながらないのかという点です。

国は、梅毒の感染拡大を危惧してか、性の健康医学財団とも協力して一昨年の11月に人気アニメ「美少女戦士セーラームーン」を使ったポスター

やリーフレットを作成し、大々的な梅毒感染防止キャンペーンを展開しています。そこには「検査しないとおしおきよ!」と大書されています。おしおきされるのは一体誰なのか。男性か、女性か、それとも梅毒に関心が薄い医療従事者なののでしょうか。

## 一带一路の医療・感染の課題について

東京大学医学部国際診療部講師 山田秀臣

「一带一路」は言うまでもありませんが中国の政治戦略です。しかし、日本人にはシルクロードの名が有名です。80年代のNHK番組で喜多郎さんのシンセサイザーのメロディを思い出される方も多いかと思います。

私は今から20年ほど前にドイツ留学にしました。ドイツ語研修を受けた時に、中央アジアの留学生たちと知り合いとなりました。その見知らぬ若い国から来た彼らは日本人と外見がよく似ていました。また、不思議な懐かしさを覚えました。そして彼らも、とても親日的でした。

話は変わりますがグローバルと共に感染症はあります。中世のペスト、戦国の梅毒、そして幕末のコレラなど、辺境の風土病が一旦に世界へ拡大しました。最近もエボラ出血熱などがありました。新たなフロンティアを通じた一带一路もその例外ではないでしょう。

一带一路は地政学的な意味を持ちます。それは近代に鉄道網の拡大で確立した中央アジアのスラブ覇権に対しての21世紀の中国資本の挑戦なのです。ヨーロッパ、この大陸の西に存在する大消費地へ物資を送るという名目ですが、経済拠点を構築している姿は、新経済(植民)時代の到来を感じることができます。ロシアが撤退した地帯へ西からヨーロッパが、東から中国が握手するように新たな勢力として帯を作っているのです。

中央アジアのアルタイ山脈が発祥と言われる民族にウラル・アルタイ語族がいます。西へ向かったのはトルコ人とすれば、東へ向かったのが日本人かもしれません。トルコ人医師が発見したベーチェット病という病気があります。この病気は別名シルクロード病とも言われ、日本人にも珍しくはありません。もしかしたら中央アジアは、私たち日本人のDNAの故郷なのかもしれません。そのようなソビエト連邦で辺境の地だった国々は今、急速に脱ロシア化を進めています。今後、日本へ波及するであろう医療問題への対策が大きな課題となっているのです。